慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文学から言語へ : アントワーヌ・ファーブル・ドリヴェにおける起源への問いと母なる言語(2)
Sub Title	De la littérature à la langue la question de l'origine et de la langue maternelle chez Antoine Fabre d'Olivet (2)
Author	國枝, 孝弘(Kunieda, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.54 (2012. 3) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20120330-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学から言語へ

アントワーヌ・ファーブル・ドリヴェにおける起源への問いと母なる言語（2）[1)]

國　枝　孝　弘

1.『トゥルバドゥール、13 世紀のオクシタン詩集』から『復元された南仏語』へ

1803 年に『トゥルバドゥール、13 世紀のオクシタン詩集』（以下『トゥルバドゥール』と省略）[2)] を出版後、その成功にも関わらず、ファーブルはそれ以降文学に関わる作品を手がけることはなかった。文学から離れるきっかけのひとつになったのは、思想史家ドリール・ド・サルとの出会いである。彼の著書『原始時代』に感銘を受け、そこに展開されている宇宙、地球の創世に関わる宇宙開闢説（コスモゴニー）、人類の創世から現在にいたる文明史に興味を持つようになる。その後ファーブルは哲学や歴史の考察に向かったと思われるが、この当時の事情を知る手掛かりは残されていない[3)]。そし

1）本研究は拙論「文学から言語へアントワーヌ・ファーブル・ドリヴェにおける起源への問いと母なる言語（1）」（慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 N°49–50, pp. 29–50）の続編にあたる。前論ではファーブルの前期の代表作である『トゥルバドゥール、13 世紀のオクシタン詩集』を中心に考察を進めた。本論では後期の代表作である『復元された南仏語』を中心に考察することで、彼の全活動時期にわたる言語観の変遷を辿る。

2）Antoine Fabre d'Olivet, *Le Troubadour, poésies occitaniques du XIIIe siècle,* Paris, Henrichs et Renouard, 1803 (Lacour/Rediviva, 1997.)

3）Léon Cellier, *Fabre d'Olivet. Contribution à l'étude des aspects religieux du romantisme,* Paris, Nizet, 1953, p. 103. Georg Kremnitz, *Préface*, p. XXIII, *in*. Antoine Fabre d'Olivet, *La Langue d'oc rétablie. Grammaire*, Wien,

て 10 年にもおよぶ長い沈黙の後、1815 年に『復元されたヘブライ語』（以下『ヘブライ語』と省略）[4] が出版される。この著作でファーブルが試みたのは、原初のヘブライ語の復元であり、ヘブライ語を世界の諸言語の祖語のひとつと位置づける言語起源論の展開である。また 1822 年に出版された『人間の社会的状態について』[5] は人類の登場から現在に至るまでの歴史を通観する壮大な書物である。ファーブル自身によれば、歴史哲学的考察から書かれた書ということであるが、現実には神知学的傾向を持った神秘主義思想に分類される作品である。こうした後期の作品群をみると、神秘主義者としてのファーブルの姿が強く浮かんでくる。しかし、その晩年は決して神知学的な思想だけで占められていたわけではない。

『ヘブライ語』の執筆を終え、出版にまでこぎつけたファーブルは、翌 1816 年、20 年以上のパリ生活の後、初めて故郷の南仏に戻り、母親や家族との再会を果たす[6]。この旅がファーブルにかつての著作『トゥルバドゥール』を思い出させることになる。故郷の言葉への思いを新たにし、ファーブルは南仏語論を書くことを決意する。実際の資料にあたるため 1818 年に再度南仏に赴き、同年から 1820 年まで 2 年あまりをかけて『復元された南仏語』（以下『南仏語』と省略）を執筆している[7]。第一部が文法、第二部が語彙、そして第三部には 1803 年の『トゥルバドゥール』が若干の変更を加えられ再掲されている。実際には、出版には至らなかったが、ファーブルは晩年ずっとこの著作を気にかけていた[8]。ファーブルの自らの故郷の言葉に

Braumüller, 1988.

4）Antoine Fabre d'Olivet, *La langue hébraïque restituée*, Paris, Eberhart, 1815, (reprint, collection Delphica, Edition l'âge d'homme, 1999.)

5）Antoine Fabre d'Olivet, *De l'état social de l'homme*, Paris, Brière, 1822, (reprint, Paris, édition Traditionnelles, 1979, 1991)

6）Antoine Fabre d'Olivet, *Mes souvenirs*, introduction et notes par Gilbert Tappa et Claude Boumendil, Nice, 1977, pp. 303–309.

7）執筆の具体的な状況については Kremnitz, *op. cit*., p. LXXVII. を参照のこと。

8）出版をめぐる事情については Jean-Marie Dahan, « Fabre d'Olivet et ses tentatives de publication de La Langue d'oc rétablie », in. *L'Occitanie romantique*, Acte du Colloque de Pau (22, 23 et 24 septembre 1994) rassemblés et préfacés par

対する想いは決して消えてはいなかったのである。

1989 年に初めて完全版が出版された『南仏語』は、900 ページ以上に及ぶ大著であり、南仏語へのファーブルの関心が並々ならぬものであったことをうかがわせるが、その目的は 1803 年の時とは大きく異なっている[9)]。一言でいうならば、文学言語から言語そのものへとファーブルの関心は移っていたのである。本人自身、1803 年の『トゥルバドゥール』は今からみれば「単なる趣味本」[10)] に過ぎず、それに対して現在試みているのは「言語研究」であると考えていた。実際、『トゥルバドゥール』は『南仏語』の第三部に再録されているとはいえ、もはや「付録」の位置づけしか与えられてはいない[11)]。

ではファーブルが目指していた「言語研究」とは何か。それは文献学的研究である。

> トゥルバドゥールについてしなくてはならない第一のことは、作品が収められている様々な草稿をつきあわせ、照合することによって校訂を施し、筆記者の無知が覆うにまかせたすすを払いのけ、かれらの言語が置かれてしまっている無秩序な状況のなかに、準拠すべきであった文法的な秩序を見出すことである[12)]。

Claire Torreilles, Centre d'Etude de la Littérature Occitane / Willam Blake et co. edit., 1997 を参照のこと。

9）Antoine Fabre d'Olivet, *La langue d'oc rétablie*, Ganges, Editions David Steinfeld, 1989, p. XLV. « le motif qui me guide dans celui-ci et le but que je me pose sont entièrement différents ».

10）*Ibid*., p. 634. « (...) je ne donnais au public qu'un ouvrage de pur agrément ».

11）*Ibid*., p. XLV. « un appendice de mon travail actuel ».

12）*Ibid*., p. 10. « la première chose à faire à l'égard des Troubadours, était de confronter les divers manuscrits où leurs ouvrages sont contenus afin de les corriger l'un par l'autre, de les nettoyer de la crasse dont l'ignorance des copistes les a couverts, et de tâcher de découvrir au milieu du désordre où leur langue y est réduite, l'ordre grammatical qu'elle devait suivre ».

ここで明らかなように、ファーブルの意図は、過去の文学作品を、様々な言語的ヴァリアントを含むコーパスとみなし、それらの比較・照合によって校訂を施すことで、過去の言語の復元を試みることにあった。トゥルバドゥール詩の文献学的研究の第一人者である、フランソワ・レヌアールがその成果を出版し始めたのが 1816 年である。ファーブルがこの新しい学問の動向をいち早く意識していたことは確かであろう。こうした時代の影響が作用しているとはいえ、1803 年『トゥルバドゥール』出版時のファーブルの認識とは大きく異なることは注目に値する。なぜならば、『トゥルバドゥール』を編んだ時の文学とは、詩的言語の彫琢による言語の完成形の例示であり、郷土の誇りと結びついた優れた文化的装置であったのに対し、『南仏語』においては、文学は、もっぱら言語を復元するための「資料」として位置づけられているからだ[13)]。

とはいえ、先の引用から明らかなように、文学作品を言語を復元するための資料として位置づけてはいるものの、ファーブルのいう言語の復元とは、文法体系の復元、つまり、言語形式の規範の抽出であった。すなわち、この引用を読む限りにおいては、ファーブルの南仏語に対する考察は、文献学的手法を用いた文法の復元ということである。事実、『南仏語』の中心をなすのは、文法と語彙についての考察である。

さらに、文法の探究と言っても、ファーブルが実際に依拠、参照したのは、18 世紀の思想家、たとえば、クール・ド・ジェブラン、ド・ブロスなどである。彼らの言語の探索とは、言語の起源の探究であり、むしろ哲学的と呼びうるものである。19 世紀の初頭は、前世紀に行われていた探究方法の影

13）*Ibid*., p. 2. « Cette langue a cet avantage singulier sur toutes les langues anciennes ou modernes que je connais, de pouvoir, quoique vivante, fournir des exemples tirés d'une littérature éteinte ; quoique éteinte, de pouvoir donner des appuis dans un langage encore vivant ».「この言語は、私の知っているどんな古語あるいはどんな現代の言語に比しても、次の特別な利点を持っている。この言語は現在も生きている言語でありながら、消滅した文学からとられた資料を提供することができる。そして消滅した言語でありながら、まだ生きている言語に支えのようなものを与えることができるのだ」。

響を残しながらも、言語についての問いが、ようやく言語の起源から言語の歴史的変化へと移ってゆく過渡期であった[14)]。こうした時代のなかで考察対象として文法と語彙しか念頭になかったファーブルは乗り遅れた言語研究者だったのかもしれない。しかし、だからといって『南仏語』の言語論としての価値は無に等しいのだろうか。その答えを出すためには、この過渡期に位置する著作に含まれる、前時代的と言われる要素と、時代が生もうとしていた新しい要素をきちんと読み解く必要があるだろう。そのためにあらためて考察したいのが起源の問題であり、その起源にとらわれたことによるファーブルの学問的限界と、その上で未然に終わったとはいえ、かすかにかいまみられる本格的な言語研究への可能性である。この二つの観点から第一部「文法」を読んでみる。

2. 文法あるいは言語の起源

『南仏語』の第一部は「文法」と名づけられているが、内容は、1）南仏語の起源、2）トゥルバドゥール詩に用いられた南仏語と現在の南仏語の比較、3）南仏語の文法構造の 3 つに分けられる。ファーブルは南仏語は「古語にして現代の言語」であると主張する。南仏語はローマ崩壊の時期から始まる長い歴史を持ち、また南仏には政治的にも文学的にもやはり長い歴史がある一方で、フランス革命勃発後も依然として話されている言語でもあるからだ。ファーブルはこの特質をもつ南仏語に対して、次のような考察を加える。

> 古語としては、その起源と原理を検討する。現代語としては、その文法形式と発展を示すつもりである[15)]。

『トゥルバドゥール』においては、過去の栄光と現在の衰退という対比ゆ

14）Kremnitz, *op. cit*., p. XXX.

15）*La Langue d'oc*, p. 3. « (...) comme langue ancienne, j'examinerai son origine et ses principes ; comme moderne je montrerai ses formes grammaticales et ses développements ».

えに、対象とする時代がもっぱら中世に限られていたのに対して、『復元された南仏語』では、時間の軸ははるかに長くとられている。古語から現代語まで、南仏語の歴史全般を描こうとするファーブルの壮大な意図がここから読み取れる。だが、「起源と原理」と言う時、いったいそれはどこまで遡りうるものなのか。またその時間軸を貫く原理とはいったい何だろうか。

> 文法は、古語の中に存在する構成原理を分析し、精神に対して、それぞれの言語の形成をうながした個別の真髄にまで到達する方法を授ける学問にまで高められるものである[16)]。

つまり、文法とは単に文を正しく書くといった規則を提供するために叙述されるものではない。文法は、言語をひとつの体系とみなす上での「構成原理」である。原理とは、ある言語とそれ以外の諸言語との違いを決定づける根拠であって、その意味からすれば、文法を分析することは、その言語の真髄・本質を見極めることに等しい。しかしその真髄に到達するという言い方には二つの難しい問いがふくまれる。まず到達するためにはどこまで遡ればよいのかという問い。そして二つ目は到達した地点が本質だというならば、本質という普遍性と言語の歴史、つまりは変化というもうひとつの言語の性質との関係をどう考えればよいのかという問いである。

二つ目の問いについては後述することにして、ここでは第一の起源に関する問いから考えてゆきたい。ファーブルは文法を分析する目的を次のように述べている。

> 私は従って、ヘブライ語の文法の復元をしたように、南仏語の文法を復元し、文献学者たちの道のりに新たな道しるべを立て、彼らが言語の

16）*Ibid*., p. 2. « (...) elle (=la grammaire) s'élève dans les langues anciennes jusqu'à la science qui analyse leurs principes constitutifs, et qui fournit à l'esprit les moyens de pénétrer jusqu'au génie particulier qui a présidé à leur formation ».

起源を知りたいと、あれほど熱望した目的へと導くことを決心した[17)]。

ここで言われている「復元」が、先ほどの構成原理を見出すという行為にあたる。何か崩れたものを修復するという意味ではなく、言語に内在する原理を探り出すということだろう。ではその原理とは何だろうか。またその原理を見出すにあたって、ファーブルは『ヘブライ語』と同じ方法を取るとしている。その方法とは何か。さらに、原理が見出されれば、我々は言語そのものへの起源へと到達することができるとファーブルは言う。この言語起源論としての主張と、南仏語の文法の著述がどう折り合うのだろうか。それを具体的にみておきたい。

まず『ヘブライ語』と『南仏語』で共通する方法論をみておきたい。『ヘブライ語』では、ある言語を復元する意味を次のように述べている。

> これらの言語（＝古語）の文法とは、言語を理解し、それらの言語の形成をうながした真髄にまで入り込み、源まで遡り、そして言語がたずさえている思念とそれがもたらす光の助けを得て、現代の言語を豊かにし、その歩みを照らし出す技術のことである[18)]。

先ほどの『南仏語』の一節と同じく、文法は言語の構成原理と考えられている。そして、原理とは、時代を経ても、決して変化をしない言語に内在

17）*Ibid*., p. XLV. « Je pris alors la résolution de procéder au rétablissement de la grammaire de la langue d'Oc, comme j'avais procédé à la restauration de celle de la langue hébraïque, et d'élever ainsi un nouveau jalon dans la carrière des philologues, pour les conduire au but si désiré de la connaissance de l'origine de la Parole. »

18）*La langue hébraïque restituée*, p. 59. « [...] la Grammaire de ces langues [= langues anciennes] est l'art de les entendre, de pénétrer dans le génie qui a présidé à leur formation, de remonter à leur source, et à l'aide des idées qu'elles conservent et des lumières qu'elles procurent, d'enrichir les idiômes modernes et d'éclairer leur marche. »

する本質を指している。ではこの文法を理解するための手がかりは何であろうか。ファーブルが『ヘブライ語』で取り組むのは品詞分析 les parties du discours であり、この方法論は『南仏語』にそのまま引き継がれている。そしてファーブルは、語の品詞を三種類にまとめている。それは名詞、動詞、そして関係詞 la relation である[19)]。関係詞に分類されているものは、従来の品詞分類でいう副詞、前置詞、接続詞、冠詞、代名詞である。これらの品詞の中で、ファーブルはどちらの著作においても、名詞が「言語の基礎」であると断言している。動詞であっても、関係詞であっても、起源において名詞でなかったものはないとし、すべての語の起源を名詞に還元する[20)]。一例を挙げるならば、前置詞の de はもともとはフェニキア語の di から派生し、この語根は id であってこれは「手」を意味した、という具合である。

さらに、名詞をすべての語の起源とする考え方は、ファーブルがもともと『ヘブライ語』を書くにあたって依拠していたジェブランの考えにのっとったものである。ジェブランは『言語と文字の起源』のなかで次のように述べ

19）*Ibid.,* p. 67. « Pour moi (...) je ne reconnaîtrai dans la Langue hébraïque, que trois parties du discours produits par une quatrième qu'elles produisent à leur tour. Ces trois parties sont le Nom, le Verbe, et la Relation (...) La quatrième est le Signe. »「私が、ヘブライ語の中に認めるのは 3 つの品詞だけである。これら 3 つの品詞は 4 つめによって生まれるものであり、その後今度は 3 つのものが 4 つめにものを生み出すのである。（…）4 つめとは記号である」。4 つめの要素として出てくる「記号」について、ファーブルは次のように自ら定義している。« J'entends par Signe, tout moyen extérieur dont l'homme se sert pour manifester ses idées. Les élémens du Signe, sont : la voix, le geste et les caractères tracés : ses matériaux, le son, le mouvement et la lumière. » *Ibid*., p. 68.「記号という語で私が定義するのは、人間が自らの考えを表明するために使う外的なあらゆる方法のことである。記号の要素とは、声、身振り、そして書かれた文字であり、それらを作り出すのは音、動き、そして精神の光である。」そしてファーブルは、音と身振りはすぐに消えてしまうものである以上、起源として探究すべきは文字であるとする。その上で記号としての文字でできた語を名詞、動詞、関係詞の 3 つにまとめるのである。

20）*La langue d'oc*, p. 76. « Il n'y a point de verbe, point de relation, si éloignés qu'ils paraissent du nom, qui n'en aient été un dans leur origine. »

ている。

> 動詞は、（…）言語の起源に関する我々の研究においては、まったく重要ではない。すべての動詞は言語の起源に遡ることなく、すべて名詞から借用されたものにすぎない。すべての動詞はある特殊な見地から把握された名詞なのであり、原始諸語中には存在しない（…）[21]。

言語の起源を探究した当時の学者たちはなぜ名詞にそれほどの重要性を与えたのか。それはジェラール・ジュネットの言うように、名詞とは事物の命名であり、事物にもっとも近い言語であるという認識が当時の思想家たちにあり、事物に近いならば、名づけにおいて、事物とその名の間には何らかの必然的結びつきが働くだろうと考えたためである[22]。ここには、事物に名がつけられるのは単に慣用から、恣意的につけられるのではなく、その事物の性質に適した名がつけられるべきというクラチュロス主義が表明されている[23]。つまり名詞を言語の基礎とするジェブラン、およびそれに基づくファーブルの言語をめぐる思想は、西洋の伝統的な言語思想に位置づけられるものであると同時に、19 世紀に至って非科学的として退けられていく思想

21）Court de Gébelin, *L'origine du langage et de l'écriture*, cité par Gérard Genette, *Mimologiques*, Edition du Seuil, 1976 (nouv. éd., collection point, 1999), p. 136. « Les verbes (...) ne sont rien dans nos recherches sur l'origine du langage ; tous postérieurs à l'origine du langage, tous empruntés des noms, tous noms considérés sous un point de vue particulier, ils ne peuvent figurer parmi les mots primitifs. » 邦訳 177 ページ。

22）Gérard Genette, p. 136.

23）「クラチュロス」は、プラトンの作品の登場人物であり、この登場人物の名前のついた『クラチュロス』では、名は慣用的につけられているのか（すなわち事物と名の関係は恣意的である）、それとも事物の本質にふさわさしい名がつけられているのか（この場合事物と名の関係は必然的である）をめぐって対話がなされている。西洋思想において、この後者の言語観をクラチュロス主義と呼び慣わしている。Cf. プラトン『プラトン全集 2　クラチュロス　テアイテトス』（岩波書店、1974）参照のこと。

であった[24)]。

しかしあくまでもファーブルは、語の中に真理があるという考え方に固執し、『南仏語』においても、文法の構成原理を知るためには、語根の分析が最も重要であるとし、語根の正確な意味を把握するために原始語へと遡ることを強調する。

> （名詞の）構成の最初の目的は、おそらく名詞が語根から離れて、どのように形成されたのかその方法を知らせることにあるだろう。しかし、この目的は、ヘブライ語のような原始語であるならば、大きな困難はともなわないが、現代に近い言語を研究するにつれて、だんだん達成が難しくなる。それらの言語の最も根本的な語でさえ、ある派生語に接ぎ木された派生語であることがしょっちゅうだからだ[25)]。

現在生きている言語の語を語根に分解し、その語根の歴史を追うということだけならばそれほど、突飛なことではない。その語根の派生のもとを追って祖語へと行き着くことを目指したのは、18 世紀後半からサンスクリット語の発見によって本格化するインド＝ヨーロッパ語族を対象とした比較言語学の目的でもあったからだ。しかし、語根を遡っていくことが、言語の構成原理を知ることになると考えるファーブルは、始源へと遡れば、名詞と事物の必然的な関係の発見に行き着くとも考えているのだ。実際ファーブルは次のように言う。

24）1866 年、パリ言語学協会は投稿論文に言語の起源と普遍言語の創造の問題を扱った論文は認めないことを宣言している。

25）*La langue d'oc*, p. 101. « Le premier but de la construction devrait être sans doute de faire connaître la manière dont les noms se forment en sortant de la racine ; mais ce but, qui dans une langue primitive comme l'hébreu, n'offre point de grandes difficultés, devient de plus en plus difficile à atteindre, à mesure qu'on travaille sur un idiome moderne, dont les mots les plus radicaux sont souvent des dérivés entés sur des dérivés ».

事物を知らないでは語を説明できないし、語を知らないでは事物を知ることはできない。すべての語はある観念の表現である。全ての語は深い道理の結果であり、永遠の原理の発展なのだ[26)]。

ここでファーブルの言っていることは、次の二つに整理できるだろう。ひとつはこれまで述べてきた語と事物の一致を辿るための語源学の重要性である。もうひとつはそれが永遠の原理を照らし出すという点だ。前者についてはさきほど前置詞 de を挙げたが、別の例をひとつ挙げておこう。それは存在動詞 être、南仏語の èsser である。この動詞についても、『ヘブライ語』と『南仏語』では、まったく同じことが言われている。ファーブルは être こそ真の動詞であり、他の全ての動詞はこの èsser から派生したと説く[27)]。なぜならば、存在を表す動詞こそ、すべての存在の根源であるからだ。そして èsser の活用の中にも存在そのものを表す音があると言う。èsser の単純過去には子音 [f] が含まれているが（たとえば一人称単数は foguèri となる）、これは呼吸音の h からきている。そしてこの呼吸こそ、我々の存在に命を吹き込むものである[28)]。このように èsser の活用に f が含まれるのは必然性があるのだと、ファーブルは主張する。

そしてファーブルは、こうした語根、あるいは音をつきつめていけば、やがてはあらゆる言語に共通の原理が発見されると確信している。たとえばその例が南仏語の「馬」と「家畜の所有」を意味する、caval と cabal の関係である。「所有」の意味をもつラテン語 equus とギリシア語の exw に対応するフェニキア語の単語 rachesf は、同時に馬も意味すると説く[29)]。このようにファーブルの語源を辿る始源への探究は、諸言語を超えて、やがて始源の

26）*Ibid*., p. 109. « On ne peut expliquer les mots si l’on ne connaît pas les choses ; ni connaître les choses si on ne sait pas les mots : tous les mots sont l’expression d’une idée. Ils sont le résultat d’une raison profonde, et les développements d’un principe éternel ».

27）*La langue hébraïque*, p. 68. *La langue d’oc*, p. 131.

28）*La langue d’oc*, p. 157.

29）*Ibid*, pp. 111–112.

単一言語に至る。その行き着いた先に、始源の語根が見つかれば、それが永遠の原理となる。それは同時に、隠された真理の顕示という意味をもつ。

> これはプラトンの考えであり、古代の賢人たちみなの考えであった。したがって、語源学とは、かつては、秘犠の重要な一部であったと思われる[30)]。

ファーブルの語源探究は、祖語の発見という言語学的な課題からは逸れてゆき、物事の真理の把握という神秘哲学的方向へと進んでいってしまう。そしてそれは古代ギリシアの秘犠へと行き着くことになる。ファーブルは、ピタゴラスの黄金律をフランス語に訳し、その序文で、古代ギリシアの秘犠における詩人の役割に触れている。それによれば、詩人の精髄 génie とは、知性 la nature intellectuelle の働きによって本源的な概念 les idées primordiales をとらえることにある。古代における詩的言語の本質は、世界の真理を照らし出すことにあり、語源の探究は古代ギリシアの神秘的概念と密接に結びついているのである[31)]。

このようにファーブルの起源の問題は、18 世紀のクラチュロス主義に根ざした言語思想に大きく傾いてしまっている。『南仏語』執筆の本来の目的は、文献学的な視点から、文学言語を、言語そのものを復元するための資料とみなし、言語そのものを復元することであった。その言語に対する認識は文法体系にとどまるものであったとはいえ、より具体的には語根の分析という比較言語研究を想起させる方法論を取り入れていたのである。しかしながら、その語根分析は、言語と事物との必然的な関係の発見すること、すなわち真理の発見という神秘哲学的傾向を脱却することはなかった。この限りに

30）*Ibid*., p. 110. « C'était l'idée de Platon et celle de tous les sages de l'Antiquité ; aussi paraît-il bien que l'étymologie faisait autrefois une partie très importante des mystères (...) ».

31）Fabre d'Olivet, *Les vers dorés de Pytagore,* Paris, Treutttel et Würtz, 1813. (reprit : Paris : Editions de la Tete de feuilles, 1971.)

おいては、19 世紀に入ってもなお言語起源論にとらわれた、時代に乗り遅れた論者として、あるいは神秘主義に染まってしまった論者として理解する以外に、ファーブルの意義を見出すのは難しいであろう。

3. 南仏語の起源、文学の意味

以上、言語の起源という問題を考える限り、18 世紀の言語起源論の影響を受けているファーブルの言語への認識は、彼の言語観の限界を示すものであった。しかしファーブルの南仏語の成立、変化についての叙述を読み解くとき、彼の説明が哲学的、あるいは秘教的な性質しか持っていないわけではないことが見えてくる。ここで先ほど挙げた二つ目の問いである言語の歴史と変化についてのファーブルの考えを読み解いてゆきたい。

『トゥルバドゥール』執筆時においては、南仏語という主題は、トゥルバドゥール詩に強く結びついていた。トゥルバドゥールの詩的言語こそが南仏語の完成形であり、そこを頂点とする栄光と挫折が描かれていた。南仏語とは、すなわち文学言語だったわけである。それに対して『南仏語』では、凋落の問題ではなく、むしろ歴史的な変化の問題が扱われている。その変化とは社会的、政治的要因による変化である。その意味で、主題となるのは言語の没落、過去と現在の断絶ではなく、脈々と続く言語の歴史の連続性とも言えるだろう。『南仏語』における、言語の歴史に関する論述は、時間的な幅も広がり、そして文学の枠組みからも離れて、南仏語についての社会言語学的な考察が繰り広げられているのだ。その叙述の特徴としてまず挙げられるのが「混合」という概念である。

第一の混合の概念は、トゥルバドゥール詩の起源に関するものである。『トゥルバドゥール』ではそもそも詩の成立の原因はほとんど述べられていなかった。それに対して『南仏語』では、歴史を遡り、アラビア文化からの影響がはっきりと述べられている。例えば、『南仏語』の第三部には、1803 年の『トゥルバドゥール』がほとんどそのまま収められている。しかし数カ所に補足がなされている。そのうちのひとつが次の箇所である。『トゥルバドゥール』では「ラテン文学が消滅して以来初めて、想像の力と詩の優美さが

展開され、脚韻の使用において新たな魅力を見せた言語（…）」[32] となっている一節が、『南仏語』では次のような表現に変更されている。

> アラビア民族の往来によって、脚韻の使用において新たな魅力を見せた言語（…）[33]

また次のような一文がそのすぐ後に付け加えられている。

> 太古の昔から、ヒンズー民族、ペルシア民族、アラビア民族によって知られていた脚韻の使用が、トゥルバドゥールたちに受け入れられるとすぐに（…）[34]

このように詩的言語の起源は一気に、8 世紀頃のアラビア民族のイベリア半島の進出まで遡ることになる。さらに、その文化の起源は、東方へとつながってゆく。もちろんここには、当時のヨーロッパの思潮であった、いわゆる「東洋の発見」が影響を与えていることは言うまでもない。しかし『トゥルバドゥール』執筆時には、南仏語の完成形としてトゥルバドゥール詩を捉えていたファーブルが、今ではその基層に他の文化の影響を、詩的言語の威信の根拠であった脚韻にまでその影響を認めているのである。

> しかし、南仏語にこそ属するもの、それは現代詩の全ての形式である。これは、南仏語が、アラビア人から受け取ったものであり、彼らをまねたトゥルバドゥールによる形式である。とくに脚韻は、フランス語のも

32）*Le Troubadour*, p. XLV. « (...) une langue enfin, où se déployai[en]t pour la première fois depuis l'extinction des lettres latines , le pouvoir de l'imagination et les grâces de la poésie, et qui offrait un charme nouveau dans l'emploi de la rime (...) »

33）*La langue d'oc*, p. 640., « (...) une langue enfin, [...] qui, par la fréquentation des Arabes, offrait un charme nouveau dans l'emploi de la rime. »

34）*Ibid*., « A peine l'emploi de la rime, connu de temps immémorial par les Hindous, les Persans et les Arabes, eut été reçu des Troubadours (...) »

のだと軽はずみに言われるが、これはトゥルヴェールがトゥルバドゥールから借用したものにすぎないのだ[35)]。

ファーブルはもはや、トゥルバドゥールを近代ヨーロッパ文芸形式の起源とし、そこで生まれた文学言語を南仏語の栄光として、文化的優位性を訴える考え方に固執してはいない。むしろ言語の歴史をトゥルバドゥールの中世よりもはるか先へと遡ってゆく。

二つ目の混合の概念は、南仏語の成立そのものに関わる。南仏語の歴史を語るときのファーブルからは神知学者として祖語を想定し、その祖語に内包される真理を求めるといった傾向は消え失せ、ひとつの言語が様々な言語の混合によって成り立っている歴史的現実を何よりも第一に強調するのだ。2000 年前のガリアの土地ではケルト系の言語が話され、フェニキア人によって変容がもたらされ、その後もギリシア語、ポエニ語が混じっていくとして南仏語が生まれる以前の混合状態からその歴史を始める[36)]。

そして実際に「南仏語」と呼ばれている言語自体も、やはり他の諸言語との混合によって成立しているとファーブルは言う。

南仏語の起源。それは、フランス語となったオイル語の起源と変わら

35）*Ibid*., p. 25. « Mais ce qui appartient encore plus particulièrement à la langue d'oc, ce sont toutes les formes de la poésie moderne, que cette langue a reçues des Arabes, au moyen des Troubadours qui les ont imités ; c'est surtout la rime, que l'on juge trop légèrement essentielle à la langue française et qui n'est qu'un emprunt fait par les trouvères aux troubadours ».

36）*Ibid*., p. XXXIX. « Il n'y a guère, me disai-je, plus de deux mille ans, qu'on parlait ici la langue celtique, et que les échos, frappés d'accens à présent oubliés, répétaient les vers mystérieux des Druides. Il est vrai qu'alors même ces accens commençaient à être altérés par un mélange de grec. Les Phocéens établis non loin de l'embouchure du Rhône, occupaient les bords de la Méditérannée [sic], et communiquaient par le commerce, leurs usages et leur dialecte aux habitans des pays circonvoisins. (...) les Phéniciens en avaient forcé les peuples assujétis à modifier leur langage ».

ないし、ヨーロッパのその他の近代語の起源とも変わらない。それは、ずっとオスク語（ファーブルによればバスク語の一方言、筆者注）、ケルト語、ラテン語、ゲルマン語の混合であったのだ。そしてこの４つの支配言語のそれぞれが、時代や場所、さらには状況によって変化しながら、何がしかの影響を与えたのである[37)]。

言語は決して純粋なものではない。神知学者としてのファーブルは、語根を細かく分けることによって、始源の純粋言語を明らかにしようとする姿勢に終始していた。しかし、南仏語の成立をめぐって歴史的な説明を展開するファーブルは、そうした起源論に引きずられず、あくまでも歴史的な事実に基づいて推論を立てる。そして、この歴史的観点からみれば、言語は、すでにその発生の時点において、混合状態にあるのだ。そして「時代や場所さらには状況」といった外在的条件によって言語は変化するという指摘は、言語に内在する構成原理を求める比較言語学とは異なる社会言語学者的観点に立っていることを示している。

混合の概念の次に、『南仏語』において大きな変化が見られるのは、フランス語との関係である。『トゥルバドゥール』でファーブルが主に依拠していたのは 17 世紀前半のトゥールーズの学者ピエール・ド・カズヌーヴであり、その考えによれば、フランス語は南仏語から生まれたとされ、ファーブルのみならず、18 世紀の多くの南仏語学者たちが南仏語の威信の再興のためにこの説を主張していた。しかしファーブルは『南仏語』においてはこの説を斥けている[38)]。代わってここでは、「分化」の概念によって二つの言語

37）*Ibid*., p. 13. « l'origine de la langue d'oc ; elle ne différa pas de celle de la langue d'oui, devenue française, ni de celle des autres langues modernes en Europe : ce fut toujours un mélange d'osque, de celte, de latin, et de tudesque, dans lequel l'un de ces quatre idiomes dominant, fit sentir plus ou moins son influence, selon le temps, les lieux et les circonstances qui le modifièrent ». オスク語については次の注が付されている。« J'entends toujours par Osque, le dialecte basque appelé Oscare, par les idigènes de la Biscaye ».

38）確かにファーブルは、ある箇所で、「フランス人が南仏語を知ることは有

の関係を説明している。この分化について、ファーブルは大まかにではあるが政治的、社会的な面から以下の説明をする。

ガリアの土地で原住民の言葉とラテン語の混合によって、俗ラテン語が生まれ、それがオイル語とオック語に分かれるようになったきっかけはストラスブールの誓約であるとする。ファーブルはオイル語とオック語は「同じ言語の二つのかなりはっきりと区別される方言」と述べている[39)]。方言程度の差しかない、ほとんど同じと言ってもよい両言語に、実際に違いが生まれてくるのは、スカンジナビア人の北フランス侵入によってであり、それによって北の言葉に大きな変化が生じたとされる[40)]。それゆえ、オイル語、すなわちフランス語の誕生は、ノルマンディ伯の宮廷であるとファーブルは叙述を進める。オック語の成立も同様に政治的な理由に求められ、その誕生はアルル王ボゾンの宮廷であるとされる。

ストラスブールの誓約や、スカンジナビアとの接触によるフランス語の誕生など、大きな事実誤認があり、現在から見ればこのような主張は成立しない。しかし、ここで注意したいことは、オイル語とオック語がもともとはほとんど同じ言語であり、おのおのの成立は政治や社会という外在的な状況が大きいとファーブルが考えていることである。その観察が間違っているとはいえ、文化的な優位性を主張したり、言語の本質に真理の存在を認めたりといったファーブルのこれまでの言語についての叙述と比較すれば、ここで展開されている叙述は、歴史的・社会的アプローチを試みているという意

意義であり、それはフランス語の中にある派生語は、その原初の形を南仏語に見つけることができるからだ」とも言っている。おそらくそれは、その二言語が派生したラテン語の名残を南仏語の方ががより多くとどめているという理由によるのではないかと考えられる。*Ibid*., p. 6. « Si les Français veulent se rendre compte de leur propre idiome, s'ils veulent remonter jusqu'à ses sources, il faut qu'ils connaissent la langue d'Oc, dans laquelle tous leurs mots dérivés ont leurs primitifs ».

39）*Ibid*., p. 17. « deux dialectes assez distincts de la même langue ».

40）*Ibid*., p. 19. « Ces nouveaux vainqueurs (...) modifièrent beaucoup la langue romane (...) ».

味では、客観性を保とうとするファーブルの姿勢を認めることができるだろう。実際、ファーブルは次のようにヨーロッパの各言語の成立をまとめている。

> 以下が時代による順番である。ここに、同じ切り株からでた主要な近代言語の政治的存在の始まりを並べることができるであろう。
> オック語　　アルル王、ボゾンの宮廷　　880 年
> オイル語、フランス語　　ギョーム・ロング剣王　　940 年（…）[41)]

このように、「切り株」という表現を使い、これらの言語がいずれも俗ラテン語という同じ株から発しているということを述べた上で、ファーブルは、成立が 60 年早いゆえに、オック語は「長子権」を主張できると締めくくっている。この「長子権」という語が 1803 年の『トゥルバドゥール』とは、異なる意味で使われていることは指摘してもよいであろう。確かに『トゥルバドゥール』でも政治的な要因が挙げられてはいた。しかし主眼は、俗ラテン語によって覆われていたガリアの土地の中で北だけに言語に変化が生じ、その結果フランス語が生まれたという説明であった。すなわちフランス語は、俗ラテン語をもっともよく保存していた南仏語から分離した言語だとみなされていた。しかし『南仏語』での「長子権」は、それぞれの言語の成立は政治的な要因によって画定でき、王権の成立が早かった分だけ、言語の成立も早かったという意味で使われているだけである。過去の栄光と現在の衰退というコントラストをいたずらに強調したり、過去の威光によって南仏語の優越性を主張しようとはしていない。その意味でファーブルの『南仏語』の執筆の第一の目的は、南仏文化の復興であったとは言い難い。

1820 年という時代を考えれば、この南仏語についての著作が、もっとロ

41）*Ibid*., p. 20. « (...) voici l’ordre chronologique, dans lequel on peut ranger le commencement de l’existence politique des principales langues modernes sorties d’une même souche.
Langue d’Oc, à la cour de Bozon, Roi d’Arles, ...880
Langue d’Oui, ou française à celle de Guillaume Longue-Epée, ...940 (...) »

マン主義的な色彩を帯び、特に南仏語が古くかつ今現在でも生きている言語だと認識をしているならばなおのこと、民族の精神性を言語と結びつけ、南仏の文化を謳う著作となってもよかったはずである。しかし、ファーブルの中にそうした意識は強くなかったと思える。それは、ファーブルが上記の言語の成立に関する叙述をするにあたって参照したスイス出身の学者、シスモンディの著作『南欧文学論』と比較するとよりはっきりするであろう。実は言語の成立の歴史について述べた先の引用箇所は、ほぼそのままファーブルがシスモンディのこの著作から引き写したものである[42)]。またトゥルバドゥールのアラブ文学からの影響についても、『南欧文学論』の第二章『アラブ文学』を下敷きにしていることは間違いない。このような引き写しの箇所がある一方で、ファーブルが一切引用をしていない箇所もまた存在する。そこに両者の意図の違いが現われてくる。

シスモンディの『南欧文学論』執筆の意図をごく簡単にまとめるならば、ラテン・ギリシア文学と決別し、騎士道文学に近代文学の源泉を求めると同時に、民族にとっての精神的同一性を保証するものとしての文学を掲げ、言語＝民族＝文化を一体視する、ロマン主義的文学観のマニフェストを作り上げることにあった。シスモンディはスタール夫人とも親交があった人物で、ラテン・ギリシア文学に取って代わる北方文学すなわち騎士道文学の評価は、スタール夫人だけではなく、このシスモンディ自身の考えでもあった。

ファーブルは、先ほどの南仏語の成立、およびその政治的な画定の叙述だけではなく、前述の南仏語が四つの言語の混合であるという指摘もシスモンディから借りてきている。

> ある正しい判断力をもった作家が、南欧文学を論じながら、この真実を強く感じ、それをはっきりと言明している[43)]。

42）J.C.L. Simonde de Sismondi, *De la littérature du Midi de l'Europe*, Paris, Treuttel et Wurtz, 1813, pp. 37–38.

43）*La langue d'oc*, p. 13. « Un judicieux écrivain, en traitant de la littérature du midi de l'Europe, a fort bien senti cette vérité et l'a exprimée très nettement ».

ファーブルはこの箇所に注をつけ、引用した作家とはシスモンディであることを言明している。つまりファーブルは、自らの著作の諸言語の成立の歴史に関する部分は、『南欧文学論』の第一章「ラテン語の衰退とロマン語の形成」に大きく依拠していることを隠してはいない。たとえば瑣末なところではあるが、ラテン語に通じた学識者の名前を Warnefrid, Luiprand, Alcain, Eginhard と列挙しているところは、シスモンディの順番とまったく同じである。

しかしながら、たとえばシャルルマーニュ大帝の言語使用の状況については、シスモンディからの引用はみられない。ファーブルは、シャルルマーニュ大帝のゲルマン語使用については次のように記している。

> 私たちは、アインハルトの証言によって、シャルルマーニュの宮廷では、フランク族のかつての言語への思い出が残されており、大帝が、祖先の王たちの偉業を讃えた、その言語で書かれた詩を書いたり、そらんじたりしてその心をなごませたことを知っている[44)]。

これは、ゲルマン系の民族は西ヨーロッパを征服した勝者でありながらも、彼らの言語は衰退の兆しを見せており、それは何よりもラテンの言語、文化を採用し始めたことによるということを述べた一節である。シャルルマーニュが心にとどめていたというかつてのゲルマン語は、それを嫌った息子のルイ善良王によって「致命的な打撃」を与えられたというのが趣旨である。

それに該当すると思われるシスモンディの叙述は次の通りである。

> シャルルマーニュは、民族の栄光への愛着心を持ち続け、アインハル

44）*Ibid*., p. 15. « Nous savons par le témoignage d'Eginhard, qu'encore à la cour de Charlemagne on conservait quelque souvenir de l'ancienne langue des Francs, et que ce prince se plaisait à distraire son esprit en écrivant et en apprenant par coeur des vers dans cette langue où l'on avait célébré les exploits des rois ses aïeux ».

トの言によれば、祖先の栄光に満ちた歌を収集させた。その息子、ルイ善良王は反対に、それらを忘却の淵に沈めようとした[45)]。

シャルルマーニュのゲルマン語への愛着と、ルイ善良王の嫌悪という叙述は同じであるが、ここでのシスモンディの意図はまったく違う。ここではフランク民族たちが、過去の偉業を民衆の詩という口承伝統によって伝えたという文脈で言及されている箇所であり、今日では、ドイツ人は再びこの叙事詩を見出して、その伝統を 5 世紀のニーベルンゲンの史実にまで遡ることができると主張しているのである。シスモンディの意図は、シャルルマーニュや家臣もドイツ語を話し、英雄的な叙事詩をうたうことによって先祖の記憶を口頭伝承のなかにとどめたのであり、民族精神は詩という文学形式の中に託され、やがては『ニーベルンゲンの歌』に結実する民族（国民）神話に至るという筋道を描くことにあったのである。すなわち、ゲルマンの民族的伝統は、詩に歌われることによって決して忘れ去られることなく、民族の精神として引き継がれていったとして、北方文学を評価することにあったのだ。口頭伝承による民族の精神の伝達という意味で、この箇所はもっとも明瞭にシスモンディのロマン主義的文学観を示している箇所だと言える。

そして、あれほどまでにはっきりとシスモンディの引用を繰り返していたファーブルが、シスモンディがもっとも重要視する上記の記述、意図にまったく言及していないところからみて、ファーブルの中には、ロマン主義思想の柱である民族主義的な文学観への意識は希薄であったと言えるのではないだろうか。言語と文化を緊密に結びつけ、そこから民族の精神的同一性を引き出すような、さらにはそこから文化的優位性を引き出してくるような立場を、ファーブルはとっていない。1803 年の『トゥルバドゥール』ではあれほど、南仏の優位性、トゥルバドゥール詩の優位性を主張したファーブルが、なぜ『南仏語』ではそうした立場をとらなかったのだろうか。

45）Sismondi, *op. cit.*, p. 30. « Charlemagne, qui tenait à la gloire de sa race, fit recueillir, au rapport d'Eginhard, ces chansons si glorieuses pour ses ancêtres ; Louis-le-Débonaire, son fils, chercha au contraire à les replonger dans l'oubli ».

ひとつには、文学ではなく言語についての論を書くといったとき、すでに前述したようにファーブルが依拠した言語論が 18 世紀の言語起源論に代表される前時代の普遍言語的な思想に依拠していたことが指摘できるだろう。しかしそれだけはない。もうひとつ考えなくてはならない問題がある。それは、過去と現在をつなぐ言語の連続性である。

4. 現在への視座と言語への愛

『トゥルバドゥール』の論考が過去の栄光と現在の衰退という対比を全面的に強調して書かれていたのに対して、『南仏語』では、南仏語は、死んだ言語であると同時に生きている言語であるとして、過去と現在は裁ち切れてはいないという認識に立っていた。その箇所を今一度引用したい。

> この言語は、私の知っているどんな古語あるいはどんな現代の言語に比しても、次の特別な利点を持っている。この言語は現在も生きている言語でありながら、消滅した文学からとられた資料を提供することができる。そして消滅した言語でありながら、まだ生きている言語の中に支えのようなものを与えることができるのだ[46)]。

故郷を離れ、パリ市民として生きてきたファーブルは、20 数年ぶりに故郷に戻り、そこでまだ話されている南仏語を耳にする。この滞在がきっかけとなって南仏語論を書くことを決意するのだが、ファーブルは、南仏語に、書かれた文字としての文学作品、すなわち文献学の対象となる資料を見出すだけではなく、今もって話され続けている言語の現実に出会うことになる。それがこの書物の深い動機の一つになっている。

では、この過去と現在のつながりの意識はどのようにファーブルの中に生まれてきたのだろうか。ファーブルはその経緯を次のように記している。

46）*La langue d'oc*, p. 2. 本論注 13 を参照のこと。

今は廃墟となっているが、歩を進めるごとに古城だったことが偲ばれる、トゥルバドゥールたちがよく訪れたこれらの場所からの眺め。山に暮らす牧師たちの声の、今でもトゥルバドゥールと同じ語調をとどめているがゆえに、彼らの詩を私に思い出させてくれる、孤独なこだま。これらが私に、あの作品（＝『トゥルバドゥール』筆者注）をもう一度見直して、より広く役に立つように、文法と語彙を加えたいと思うようにと誘ったのだ[47)]。

現在の人々の声が15年も前に書かれた自らの著書『トゥルバドゥール』を思い出させる。今の声が新たに南仏語の文法と語彙の執筆へと向かわせる。それは、トゥルバドゥールの言葉が今も変わらずに話されているとファーブルが確信したからである。この箇所を読むと、『南仏語』の執筆の動機には、過去へと遡り言語の原理を文法体系の中に探し求めるという目的だけではなく、その過去とつながる現在のことばのあり方についても何らかの考察をしたいという意志があったと考えられる。事実、ファーブルの関心は、過去のことばを依然として含んでいる現在のことばへと向かう。

私は観察者として、我らが古きトゥルバドゥールの故郷を巡った。彼らが腰を下ろしたのと同じ岩に腰を下ろし、同じ岸辺に立ち、厳しく、野生のままの自然と向かい合い、こうして彼らのロマンティックな歌の響きを聞き、彼らの子孫の口から、忘れられた言語の貴重な残りを集めたのだ[48)]。

47）Antoine Fabre d'Olivet, *Les Notions sur le sens de l'ouïe en générale*, Paris Bretin, 1811, pp. 107–108. Cité par Kremnitz, *op. cit.,* p. XXVI. « Mais la vue de ces lieux fréquentés par les Troubadours, ces vieux châteaux en ruines que j'y reconnais à chaque pas, ces échos solitaires qui me rappelaient leurs chansons, en répétant les accens de leur langue parlée encore par les pasteurs des montagnes, tout me porta à revoir cet ouvrage, et à le rendre d'une utilité plus générale, en y ajoutant une grammaire et un vocablulaire ».

48）*La langue d'oc*, p. XXXVIII. « (...) je parcourais en observateur la patrie

南仏語・南仏文学の研究者ロベール・ラフォンはこの箇所について、「ファーブル・ドリヴェは、明確で豊富な実例を用いて、オクシタン語の歴史的同一性を証明している」[49] として、『南仏語』を言語研究の書と捉える立場をはっきりと取っている。また、「一貫性のある音の派生関係について洞察し、一定のつづり字を構想することができた」[50] として、この時期に、南仏語に音と文字の観点から規範化を試みようとした数少ない人物としてファーブルに大きな評価を与えている。当然ながらそこには、文学言語を頂点とするヒエラルキーは一切存在しない。1803 年の時点においては、トゥルバドゥールの完成した言語に対して、現在の農民たちにおいては「無知で、崩れた田舎言葉がその規則になってしまっている」[51] と言っていたことを思い出すとき、そのときのファーブルの言語に対する見方と、『南仏語』のファーブルの言語に対する姿勢との違いは決定的である。

もちろん限界はある。同じくラフォンが指摘するように、ここで「オック語」という名称が使われているにも関わらず、ファーブルが対象とするのは、自分の故郷、セヴェンヌ地方の方言に限られている。しかし自分の故郷のことばに限られるとしても、そのことばの「今」を見つめようとしていること

---

de nos vieux Troubadours, assis sur les mêmes rochers où ils s'étaient assis, debout sur les mêmes rives, en face de la même nature, vigoureuse et sauvage, écoutant, pour ainsi dire, l'écho de leurs chansons romantiques, et recueillant de la bouche même de leurs descendants les restes précieux de leur langue oubliée ».

49）Robert Lafont, « La conception de la langue occitane chez Fabre d'Olivet », in. *Actes et mémoires du Congrès International de Langue et Littérature d'OC et d'Etudes franco-provençales*, Avigon 1964, pp. 343–349, p. 345. « Fabre d'Olivet fait de façon nette et abondante la preuve de l'identité historique de l'occitan ».

50）*Ibid.*, p. 346. « ce qui explique qu'il ait pu réfléchir de façon cohérente à la filiation des sons,et concevoir des graphies constantes (...). »

51）*Le Troubadour*, p. 261. ここでファーブルは南仏の学者ソヴァージュが南仏語の辞書を作るのにあたって、農民たちの言葉を使ったことを非難している。« M. l'abbé de Sauvage, qui a jugé plus à propos de consulter quelques paysans ignorants dont le patois informe est devenu sa règle ».

には変わりない。それでは実際に故郷で見出した言語とはどういうものであったのだろうか。

ファーブルが現在の南仏語の話者と接して、最も特筆すべきこととして、彼らの発話に文法的な誤りがないことを挙げている。

> 彼ら（＝セヴェンヌに暮らす人々、筆者注）は、オック語しか話さない。そして、特筆すべきは、彼らが、文法の何たるかを知らずして、際立った文法的純粋性をもってこの言語を話しているのだ[52)]。

文法的に間違いがないとは、たとえば、フランス語でいう複合時制の助動詞 avoir の前に、直接目的語が置かれた場合、avoir と直接目的語は性・数の一致をする、目的節に接続法を要求する主節の動詞が条件法に置かれた場合、目的節内の動詞は接続法半過去で活用する、といった文法的規則の問題である[53)]。これだけを考えれば、単にファーブルの主張は、南仏語には正しさの規範、「不変の文法規則」[54)] があると言っているだけにも聞こえる。つまり、話者の言語使用の状況における文法の正誤だけを問題にしているかのように思える。しかしファーブルは、ただ単に規範の有無にこだわっているのではなく、その規範の形成にあたっては、オック語とオイル語に本質的に差異があることを指摘するのだ。

> 私は以下のように考えるに至った。オック語の文法形式は、原理的にそれらを発展させてきた、性質そのものに依拠している。それに対して

52）*La langue d'oc*, p. XLII. « Ils (=les habitants des Cevennes) ne parlent absolument que la Langue d'Oc, et, ce qui est remarquable, la parlent avec une pureté grammaticale toute particulière, quoiqu'ils ignorent cependant ce que c'est qu'une grammaire ».

53）*Ibid*., p. XLIV.

54）*Ibid*., « (...) la langue d'oc, conservée encore parmi les habitants des montagnes des Cévennes, procède aujourd'hui selon les règles grammaticales invariables, (...) ».

オイル語、すなわちフランス語は、後から、そして模倣によって、技巧上のものとして文法形式を受け取ったのだ。その結果、前者においては、自然で固有の形式が、後者においては、人為的で外的なものとなっているのだ[55)]。

ファーブルは人為と自然という対立のもとにオック語とオイル語（フランス語）を捉えている。フランス語という言語は、普通に話せば、誤りを含んでしまうことは避けられない。後から意識的に、その規則を頭で理解し、それを模倣することで学んで身につけてゆく言語である。人の手がたえず加えられるのがフランス語なのだ。それに対して、南仏語にはもともとそなわっている規則、「自然の法則」[56)] があり、さらにその法則を意識しなくても、ことばを発することできる言語である。ここでも、ラフォンが指摘するように、フランス語と南仏語の対立には、ファーブルの「書かれた、そしてコード化された言語の人為性に対する反抗と、生きた使用への賛意」を認めることができるであろう[57)]。

だが、自然の法則、人為性のない言語というものをさらにつきつめて考える必要がある。ファーブルが、自然の法則の存在を指摘していると言っても、それは人間が関与しない文法の内在的な法則の歴史的発展を意味しているの

55）*Ibid*., p. XLIV. « J'étais conduit à penser que la langue d'oc devait principalement ses formes grammaticales à la nature qui les avait développées toute seule ; tandis que la langue d'Oui, ou la Française, avait reçu les siennes de l'art, postérieurement et par imitation, en sorte que les formes naturelles et endémiques dans la première, sont dans la seconde artificielles et exotiques. »

56）*Ibid*., p. XLV. « Cette loi de la nature où j'étais arrivé en dernière analyse, et que je voyais, à n'en pouvoir douter, présidant au développement des langues, me parut par son importance, mériter d'être examinée ».

57）Robert Lafont, *op. cit.*, p. 347. « Mais sous ce contre-sens, apparaît la révolte contre l'artifice de la langue écrite et codifiée et l'admiration pour un usage vivant, la reconnaissance du fait que la syntaxe populaire occitane est riche et idiomatique, que le paysan parle avec des outils grammaticaux d'un grand raffinement ».

ではない。また、人々が文法的に誤りなく、規則通りに正しく話しているという状況のみを主張しているのでもない。そうであれば『南仏語』は文法の規範書という性格しか持つことはなかったであろう。むしろここで着目すべきなのは、話者とその話者が話すことによって顕在化する言葉との具体的な関係についてのファーブルの言及である。

ファーブルは「文法」の第十五章「シンタクス」において、現在の文法規則で言うところの助動詞の用い方や、態の問題を扱いながら、セヴェンヌの農民たちは話すときに動詞活用を間違わないということを強調している。これは言語の使用者が、適切な語形やシンタクスを頭でいちいち意識的に選択することはなく、自然にその言い回しを選択していると考えてよいであろう。

> 農民たちは言葉を上手に話すとか下手に話すということがどういうことかわかっていない。それでも彼らは喚起される言葉をそのまま話しているのである。そして言葉は常に正しく喚起されるのである[58)]。

「農民たち」という言い方には、パリの知識人が、素朴な民衆像を求めて、憧憬のプリズムによって故郷を想い起こすようなロマン主義的な傾向を多少感じなくもない。だが、ここにあるのは、故郷を幻像によって理想化してゆくような精神ではない。読み取るべきは、言葉は人間が自ら意識的に選び取ることによって発話の状況の中に現れてくるのではなく、言葉自体が人間の口を通して立ち現れてくるというファーブルの認識である。

> 農民たちが能動型を使うとき、彼らにとっては法と時制の知識に関する難しさ以外に他の難しさはない。この知識は、子どものときにすでに自然によって心に刷り込まれたものであり、彼らが、母親から、その与

58）*La langue d'oc*, p. 207. « Les paysans ne savent pas ce que c'est que de bien ou mal parler leur langue ; ils la parlent telle qu'elle leur est inspirée, et elle leur est inspirée toujours bien (...) ».

えられる乳を吸うようにして受け取るものなのだ[59)]。

話している人間の能動型の法と時制の使用に関して述べた一節であるが、ここには今まではあまり明示的には現れてこなかったファーブルの言語意識が、浮かび上がってきているようにみえる。それは、言語とは理知の力で獲得してゆくものではなく、すでに与えられているものなのだという認識である。そして、与えられているのは文法的な正しさという内容であるよりも、むしろことばが他ならぬ母から与えられているという事実こそ、ファーブルの言語観を考える上で重要である。

ここで再び私たちは、1803 年の『トゥルバドゥール』の献辞に示されたファーブルの言語意識、その後に続く序論と論考ではすぐさま消し去られてしまった言語意識に立ち戻る。過去から現在への言語の一貫したつながりを考えた時、ファーブルの目の前に現れたのは、何よりも、南仏語を使って暮らしている人々の生の実像である。フランス語やその他の外国語は、意識的に学びとられる言語であり、彼が物心ついて以来学んできた、伝達のための理性の言語である。それに対して、ファーブルが故郷で発見したのは、自然、郷土、その中で脈々と伝えられてきた、我々が気づいた時にはすでに受け取っている、魂に刻まれた言語である。ここで留意すべきは、ファーブルにおいて、この言語は文化や民族といった郷土意識に結びつくことはなかったという点である。それはなぜか。ファーブルが見出した南仏語とは、自分の子供時代のことばである。すなわちことばと最も自然に、直接に結びつくのは郷土ではない。ことばを与えてくれるのは、まさに母であり、乳を吸うような一体感の中で、ことばは私たちの中に生まれてくるのだ。これこそがファーブルの言う体感としての言語である。ファーブルの原体験として、この体

59）*Ibid*., p. 208. « Lorsque c’est la forme positive, que ces paysans emploient, il n’existe pas pour eux d’autre difficulté que celle qui est attachée à la connaissance des modes et des temps, qui leur est inculquée par la nature dès leur enfance, et qu’ils reçoivent de leur mère en suçant le lait dont elle les nourrit ».

感としての言語は消え去ることはなかったのである。

さらにもう一度『南仏語』を書くきっかけとなった母との再会の時に戻ろう。

> 私は長い間私の胸に母を抱きしめた。幸福の感情は表現することが難しい。（…）私が子どもの情愛と呼んだ感情[60]。

母親との久しぶりの再会を果たしたファーブルの心を満たしたのが「情愛」affection である。『ヘブライ語』を書くのに求められた抽象的な省察から解放されて、南仏へと向かわせたのがこの情愛であったのだ。いくら学術書としての南仏語論を書こうと、言語を研究対象としたといっても、その発端には母につながる情愛があったことを忘れてはならない。そしてこの「情愛」がときに、「愛」amour と峻別されていたように、言語への愛は、「郷土への愛」とは次元の異なるものであった。この違いがファーブルの中に強く意識されていたとは言えなくとも、感情の次元では保たれて続けていたのであろう。だからこそ、ファーブルの言語についての探究は、南仏語、南仏文化の復権運動と直接結びつくことはなく、同時に偏狭な民族主義的イデオロギーに染まることもなかったのである。ファーブルにとっての母語とは、共同性や民族性へと回収されない生のことばなのである。

確かに本人のなかで過去と現在をつなぐ言語の連続性の問題は、言語の起源の問題へと移し代えられてしまった。しかし同時に、ファーブルを今現在へと向かわせる視座も残されていたのである。南仏語は自然の発露として現れるのだとファーブルが確信したとき、彼は、過去の復権といった文学言語の優位性という限界からも、偏狭な郷土主義の閉塞からも抜け出すことになった。その自然性の象徴が母の言語であり、そこに言語の生命があるのだ。我々が言語を話す以上、かならずこの根源的な自然の状態から始まるのだ。

60）*Mes souvenirs*, p. 305. « Je la (= la mère) tins longtemps serrée contre mon sein avec un sentiment de bonheur très difficile à décrire. [...] ce sentiment que j'ai nommé affection filiale ».

ファーブルは、学問として言語を対象としようという意図を持っていた以上、そうした意識を前面に出すことはなく、むしろ心の奥底に眠らせることになった。それでも自分の存在を成り立たしめる母、そしてその母から与えられる言語に無償の情愛を注いでいたことには変わりない。もちろんそれは科学とは相反する心情である。だが、波乱に富んだ人生を歩み、最期は失意のなかで生涯を閉じたファーブルの創造の源泉にはこの情愛があったのではないだろうか。

5. 言語と文学の乖離

ファーブルが生まれたのが 1767 年。同じ年には、ロマン主義の代表的小説『アドルフ』を書くことになるバンジャマン・コンスタンが、前年にはスタール夫人が生まれている。ロマン主義的な風潮の中にファーブルも当然身を置いていただろう。その中で、1803 年に、当時はやった中世趣味に応える『トゥルバドゥール』が出版される。ファーブルの生まれる約 10 年前には、ジョゼフ・ド・メーストルが、約 10 年後にはバランシュが生まれている。その意味で神知学、神秘思想が反近代的な思潮としてまだ存在していた時代であり、ファーブルがそうした思想的傾向に引き寄せられたことも理解できる。そしてレヌアールは 6 歳上である。いよいよ文献学の時代が始まろうとしていたのである。ファーブルはこうした時代の思潮を、混乱した形であるとはいえ、積極的に汲み取ると同時に、そのどれか一つに単純には収まらなかった作家であった。そのような多様さが、逆に言語への洞察の学問的深化を阻んだとも言える。

だがそれでも、『トゥルバドゥール』から『南仏語論』へと至る変化は、文学言語を頂点とするヒエラルキー構造という認識を、言語についての考察から排除してゆく道筋として考えることができるだろう。文学に言語の完成形態を求めるのではなく、文学は、言語そのものの構造を知るための資料という位置づけになったのである。

もちろん、ファーブルが言語そのものをめぐる考察を進歩させたとは言い難いのも事実である。文献学に関心を持っていた限りにおいて、『南仏語』

の実際の考察は、ほとんどが文字言語を対象とするにとどまっていた。また過去へと言語を遡り、言語の本来の形を復元すると言ったとき、ファーブルの手元には、クール・ド・ジェブランやド・ブロスといった 18 世紀のクラチュロス主義にもとづく言語起源論についての書物しかなかった。それによって結局はファーブルは言語を真理を啓示する手段であるという思弁的な考えを捨てることはできなかった。

また、当時の学問の水準にファーブルの『南仏語』を置き直してみても、文献学の分野では、レヌアールが本格的にトゥルバドゥール文献の校訂を行い、アカデミーの会員になるほどの学問的業績を挙げたのに対し、ファーブルにはそうした学術的な専門性はほとんど認められなかった。またロマン語の起源については、フランスではクロード・シャルル・フォリエルによって、歴史言語学的アプローチが本格的に始まり、ファーブルが依拠していたような社会言語学的アプローチは影を潜めることになる。フォリエルは、言語の変質は、言語の内在的な法則に基づくものであり、社会的政治的要因を排することが、言語という学問領域の独立性を画定することになると考えたのだが、こうした思想がいよいよフランスの言語思想の中心となり始めるのである[61)]。

しかしだからといって、ファーブルの思想がすべて時代の思潮の中に解消されてしまうとは言えない。言語を一貫した連続性の中で考えるという思考は、一方では過去へと回帰してゆく方向性を持ったが、同時に＜今現在＞の言語のあり方、＜今現在＞において話している人々のことばの現実をファーブルに発見させることになったのである。実際にはその生きていることば自体を具体的な研究対象とし、本格的な論考を発表するには至らなかった。し

61）Cf. Christine Pouzoulet, « Enjeux idéologiques de la philologie : débats sur la formation des langues romanes (Fauriel, Raynouard, A.W.Schlegel, Diez...) », in. *La fabrique du Moyen Age au XIXe siècle : representations du Moyen Age dans la culture et la littérature française du XIXe siècle*, sous la direction de Simone Bernard-Griffiths, Pierre Glaudes et Bertrand Vibert, Paris, Honoré Champion, 2006.

かし、今のことばを民族のアイデンティティの根拠とするようなロマン主義的なナショナリズムに回収せず、文学言語の栄光からも遠ざけたファーブルに、もし 18 世紀的な言語哲学思想ではなく、彼が母への情愛から見出すに至った現在のことばと、そのことばを使っている人々の心的態度を対象とできるような学術的な知識があったならば、言語そのものを対象とする言語思想が生まれる契機があったのではないか。

残念ながら、そうした契機を得ることなく、『南仏語』も草稿のまま、ファーブルは人生を閉じることになる。ファーブルの心根には愛という文学的な主題が残っていた。しかし自らの創作においても文学言語から遠のいていたファーブルはそれを文学的なディスクールとしても結実させることはできなかったのである。